東洋英和女学院大学　国際関係研究所
Toyo Eiwa-The World Commentary
Toyo Eiwa-The World Commentary は、タイムリーに世界情勢を分析し、公共の理解に資するためのプラットホームです。このコメンタリーは、著者の意見であり、東洋英和女学院大学の意見を反映するものではありません。
お問合せ E-Mail：kokusaiken@toyoeiwa.ac.jp



No. 112（18 Nov. 2026）

デイトン合意後のボスニア・ヘルツェゴヴィナと博物館―誰が文化を支えるのか

町田小織　人間社会学部　専任講師

11 月 3 日～ 4 日、サラエヴォのボスニア・ヘルツェゴヴィナ国立博物館で ICOM（国際博物館会議）南東欧地域連盟の年次会議が開かれた。テーマは「分断された世界をひとつにする博物館」。同連盟は、博物館が社会的、文化的、政治的な隔たりをどのように埋められるかについて、経験を共有し、対話する場となったと報告している。

だが、会場となった国立博物館自身が、制度的な宙づり状態に置かれている。同国では 10 月 4 日に総選挙が実施され、民族別の利害を代表する政党が引き続き政治的影響力を保った。内戦終結のデイトン和平合意から 30 年を経た今も、民族間の政治的対立は続いている。同合意後の統治体制では、国家レベルの文化政策を担う制度的基盤が整備されていない。国立博物館を含む 7 つの国家的文化機関は、法的には国家機関でありながら、管理・財政上の責任を担う主体が明確でなく、安定した運営基盤を欠く。国立博物館は財政難を背景に、2012 年 10 月から約 3 年間、一般公開を中止した。同館は 400 万点以上の資料を所蔵する南東欧有数の博物館である。民族や宗教を超えて共有される文化遺産を守る同館が、民族別の政治的対立と複雑な統治構造の中で、宙づりのままである。

国による安定した支援が得られない中、職員は閉館中も無給で出勤し、収蔵品を守り続けた。2015 年には NGO アクツィヤが「Jasam Muzej（私は博物館）」キャンペーンを展開し、博物館を守る取り組みへの市民の賛同と連帯を呼びかけた。現地メディア N1 の報道によれば、期間中に博物館を訪れた市民は 3000 人にのぼった。2015 年 9 月に同館は再開し、2016 年、職員と活動家がヨーロッパ・ノストラ賞（EU 文化遺産賞）「献身的奉仕」部門のグランプリを受賞。審査員は、市民の支持を集め、宗教的・文化的多様性を示す収蔵品を守った点を評価した。だが、市民の力だけでは制度や財政の問題は解決せず、今も課題は残されている。

博物館やその他の文化機関は誰のものなのか。そして、それを支える責任は誰が担うのか。この問いは、事情は異なるものの、財政難や運営体制の課題を抱える日本の博物館にとっても他人事ではない。

11 月 21 日、JICA 市ヶ谷で開催される日本・ボスニア・ヘルツェゴヴィナ外交関係樹立 30 周年記念イベントでは、映画『キス・ザ・フューチャー』の上映後、指揮者の柳澤寿男氏とともに、音楽と博物館という二つの視点から、同国の社会について語り合う。この問いを、映画とパネルディスカッションを通じて、会場の皆さんと一緒に考えたい。

関連イベント：JICA 主催『キス・ザ・フューチャー』上映会＆パネルディスカッション
イベント詳細・申込はこちら

